

運動会下賀茂寮五十周年に寄せて

平成八年入学 家田 淳一

平成二九年、静岡県南伊豆町下賀茂にある東京大学運動会保健体育寮(下賀茂寮)は五十周年の節目を迎えました。これを記念して、同年七月、学内外の関係者が神田の学士会館に集い、盛大な記念式典が催されました。

その際に配布されました『五十周年記念誌』に、下賀茂寮への思いを綴った文章を載せて頂きました。お見苦しい点もございりますが、以下再掲させて頂きます。

「現世のアジール、カキカイリョウ」

H8年入学 家田淳一(総務部・合気道部)

ある晩、道場の片隅に集められた一年生は、上級生から「カキカイリョウ」という耳慣れない言葉の説明を受けました。それは、夏休みの間、大学の施設で手伝いを募集しており、部からは四つの保健体育寮に参加しているとのこと。後日希望者を募るとしてその場は解散になりましたが、下賀茂寮の話を読まれた水庭・小原両先輩に数名手招きされ、「君達向いてそうだから」と直接お誘いを受けました。周りのやんわりとした制止を振り切って志願した猛者も含め、ムササと私、ノイーとトクの二組が順番に南伊豆を目指すこととなりました。

聞くところによれば、海の戸田、湖の山中、山の乗鞍に対し、下賀茂は海と山の要素を併せ持ち、まずは丈夫な胃と強靱な足腰、加えて今で言うコミュニケーション力が必須とされていましたが、果たしてその言に間違いはありませんでした。

はじめの夏は、寮務、浜辺のお仕事、OB会と、ほとんど別世界に迷い込んだ小動物の様子で、体験すること全てに圧倒されたまま東京に退散しました。が、このわずか一週間弱の寮での生活が世間知らずの若造に与えた衝撃は実に強烈で、謎の喻えで恐縮ですが、「人生の股割り」ともいえるような出来事でした。以後、私の心とからだの可動域をグーッと押し広げてくれた、と思うからです。

二度目の夏に、総務部員として戻ってきた頃には、自分でも可笑しいくらいに愛戦士シモガマーになっていました。トンネルを抜け曲がりくねった国道の先に海が見えると諸々の雑事が体から振るい落とされ、心が自由に広がっていくあの

爽快感は、まるで本で読んだアジールを現世に見出した思いでした。下賀茂との出会いで私の青春はようやく動き出し、色彩と創造力を得たのだと、今ならばつきりと理解できます。当時繰り返し流れていた、真心ブラザーズのあの夏の曲が、年を経た今でも原色のイメージでよみがえってきます。

人との出会いもまさに一期一会。マジうめえとシャーベット状のビールをのどに流し込み、甘酸っぱい思い出話に build up した胸をかきむしり椅子ごと後ろにひっくり返ったり、しかしアレですなーと嘆かわしいことこの上ない世情にまつたくですと追従したり、全てうちのシヤチのせいにして、現地調達したり、心の敗残兵だったり…。限られた時間であったにもかかわらず、決して消えることのない思い出を共にした皆様、またお目にかかれる日を夢見ています。

私といえば、卒業後に家族を得、現在は茨城県東海村にて物理学研究(スピントロニクスというナノテクの分野です)に取り組んでいます。初任地の仙台に移り住んだ頃から、寮の集いにも無沙汰をするようになりましたが、五年ほど前に幼い子供達を夏季特別開寮中の下賀茂寮に連れて行くことができました。管理人の須藤さんご夫妻の温もりに浸り、バカ騒ぎしている現役に苦言を呈しつつ、変わるものと変わらぬもののベストミックスを十分に満喫して参りました。

注ぎ足してきた老舗のタレの如く、諸先輩方のエキスが五十年にわたってしみこんだ濃密な空気に浸れることこそ下賀茂寮の魅力の源であると思います。そこには、南伊豆町の豊かな自然と、歴代管理人・体育第一係の方々の温かいまなざしがあります。この場所を大切にし、後に残そうとするOB OGがいます。私はこれらの全てから、自分でも思ってもみなかったような人生の楽しみ方を教えて頂いたのだと思います。(了)

「後記」

本号の森本先輩の寄稿文にありますように、現在下賀茂寮は(何度目かの)存亡の危機に面しています。すでに短期間ながら千を超す廃止反対の署名(協力を受けた皆様、誠にありがとうございます)を携え、我が部を含む多くの運動部OB OGと寮を愛する人たちが、大学経営陣と新しい運営方法を模索している最中です。

「一度寮を壊してしまいますと、簡単には同じものは作れません。」皆様のご支援を賜れますよう、この場をお借りしましてお願い申し上げます。